

サーチライト With Pastor Jon 創世記 10 章 パート 1

このメッセージはアップルゲート クリスチャン フェローシップの、ジョン・コーソン牧師が公開したメッセージを、アメリカ在住の日本人クリスチャン木下言波が翻訳して YOUTUBE やブログに上げたものを文字化したものです。世界的なインターネット規制が始まろうとしています。私達はその日のために、文字にして紙に記録する必要を感じました。また、インターネットに不慣れな方や字幕を追って読むのが困難な方のためにも必要があると主に迫られたと感じます。

※インターネットのメッセージを、文章化するこの働きを始めた姉妹が、目の治療をされました。どうか、りよくさんの病後の弱さを覚えて、お祈りください。

「今日、もし御声を聞いたら、あなたがたの心を頑なにしてはならない。」ヘブル 4 : 7

メッセージ by ジョン・コーソン牧師 アップルゲート クリスチャン フェローシップ

<http://joncourson.com/>

7590 Highway 238 Jacksonville, OR 97530

訳 by 木下言波 DivineUS : <https://www.youtube.com/user/TheDivineUs>

筆記 by Rumi

創世記 10 章。

創世記の 11 章までは全ての基礎となるもので、ここに聖書神学の全貌を理解する鍵があります。

これまで見てきた通り、11 章までに全てのものはじめ一世の創造のはじめ、宇宙のこと、結婚のはじめ、家族の始まり、罪と悪の始まり、福音の始まりが記されていました。

創世記 3 章 15 節の福音の型となるもの、蛇の頭を砕く、来たるべき救い主の約束も。

そういう訳で、全ての基礎となるので、12 章に入ったらもっとスピードアップしますが、11 章まではゆっくりと進んで、時間をかけて学んでいきます。

洪水が終わり、地球上に再び人が増え始めました。

10 章は「民族一覧表」と呼ばれていますが、人類学の基本、基礎、国々の文化や人種について学んで理解しましょう。

ここでは、人々がどのようにして増え、どこへ移動したのかを見ていきます。

忘れてはならないのが、今夜この部屋にいる全ての人がノアの直系だということです。

私たちは皆、アダムの子孫であるだけでなく、ノアの直系の子孫でもあるのです。

ご存知の通り、ノアは妻と 3 人の息子セム、ハム、ヤフェテ、それに彼らの妻たちと箱舟に乗りました。

なので、私たち皆がノアの子孫であり、セム、ハム、ヤフェテの中の誰か、或いは組み合わせの子孫です。

10 章に記されている内容を通して、世界史、人類学をたくさん見ることができますが、その中からいくつか絞って説明していきます。

これはノアの息子、セム、ハム、ヤフェテの歴史である。

大洪水の後、彼らに息子たちが生まれた。(創世記 10:1)

この章の中には全部で 70 家族が記されていますが、これらがノアの 3 人息子の子孫だということです。

ヤフェテの子孫が 14 家族、ハムから出たのが 20 家族、そしてセムからが 26 家族。合計 70 家族。

この 70 家族から全ての国家、言語、民族ができたのです。

でも、「たった 3 人の人から、どうやって全ての、こんなにたくさんの民族ができるのか？」と聞いたことはありませんか？

考えたことはありますか？

ところで、人種や民族の発展について語る時、是非読んで欲しいのが、ヘンリー・モリス博士の『創世記の記録』

モリス博士は非常に聡明で、創世記の中で一般的に問題だと言われる部分を的確に理解し、実にうまく解き明かしています。

ですから、これらの事柄について更に深く学びたいなら、モリス博士の本を強くお勧めしますよ。

彼は「大規模な進化はないが、微小な進化があることを理解しなければならない」と指摘しています。

すなわち、ある種から別の種への進化はないということ。

サルは未だかつて、そしてこれから先も、絶対にヒトにはならない。

猿はサルのまま。犬はイヌのまま。

だけど、イヌ種の中では、あらゆる形で小さな変化はあります。

「自然選択説」と呼ばれるものです。

例えば、シベリア・ハスキー犬のように長くて密な毛を持つ犬種は極寒の地で繁殖できるけど、チワワはそこでは生きていけない。

しかし、チワワはティワナやメキシコなどでは適応する。

このように、イヌはその種の中で自然選択をしながら、小さな進化を遂げています。

その地域に、その気候に最も適合した特性の種がそこで繁殖し、最終的に支配するようになるのです。

モリス博士は同じように説明を続けていますので、興味のある方は調べてみて下さい。

とてもシンプルで、尚かつ数学的にも辻褃が合います。

ほんの短期間に、人の特性が各地域に適応できるように変えられて、それぞれの居住の場所を決定していく。

そのため、人類学的に見ていくと、人種によって特徴があることが分かるでしょう。

地域毎に置かれた特定の人種には、そこに適応しやすい特徴があるのです。

そこがどういう環境であろうと、全く何も問題ない。

それが微小な進化、種の間で発生する自然適応で、変化が起こり、強い種が支配するようになる。

そうして、生き残ったものが繁栄していくんですね。

では、補足は終わりにして、セム、ハム、ヤフェテ。

彼らの名前と意味については前回お話ししましたが、とても重要なので覚えておいて下さい。

まず、ハムは黒人でしたね。

彼の名前の意味はそのまま“暑い”“黒”

同じようにセムとヤフェテにも、それぞれ明確に区別される特徴的な意味があります。

セムの意味は栄光。

これは神の栄光で、神の栄光がセムに対して、そしてセムを通して現れるという意味。

セムの子孫、セム族はユダヤ人とアラブ人。

しかし、真の生ける神はアブラハムからイサク、イサクからヤコブが出ることを世に公言し、成就しました。

アブラハム、イサク、ヤコブ、この家系から、言うまでもなくユダヤ人が出ます。ヘブル民族です。

次に、アブラハム、イシュマエル、エサウ。ここからはアラブ人。

ということで、セム族から神の栄光が現れます。

アブラハムはセム族の子孫でした。

ヤフェテの意味は拡大された者、支配者。

ここで前回の章を振り返ってみると、[創世記 9 章 26 節-27 節](#)でノアは言いました。

26 「ほむべきかな、セムの神、主。カナンは彼らのしもべとなるように。」

27 神がヤフェテを広げ、彼がセムの天幕に住むようになれ。」

ヤフェテは広げられ、支配者となる。ただし、“セムによって覆われている限りは”
どういう意味でしょうか。

世界史を学んでいくと、歴史的にヤフェテの子孫が世界を支配してきたことは、否定のしようがありません。しかし、ヨーロッパの人々、ヤフェテの子孫である民族の人々が、セムの神について正しく教えられ、受け入れるまでは、暗黒時代と言われる中世時代の暗闇にいました。

ヨーロッパ民族や世界史を学んで必ず見えてくるのは、ヨーロッパの諸文化が、セムの神、真の生ける神を受け入れて従ったその時から啓発されたということ。

それまでヤフェテの子孫は、文化文明とは全く縁のない民族でした。

学生時代に歴史を学んだ人なら、ヨーロッパが暗黒時代をどのように過ごしたか知っているでしょう。

またそれは、聖書預言を知らなければ、到底理解できなかつたでしょう。

ヨーロッパ人は野蛮で教養も希望もなく、偶像崇拜者、ぶざまな敗北者、どうしようもない輩だと思われていました。

ところが、彼らが真の生ける神、セムの神を知り、理解し、自分たちの中に取り入れるや否や、神のパワーと祝福がヨーロッパ世界に注ぎ込まれたのです。

まさに、聖書に書いてある通り。

27 神がヤフェテを広げ、彼がセムの天幕に住むようになれ。」

セムの覆いです。

セムの神を理解するなら、とも言えますね。

26 ほむべきかな、セムの神

ややこしいかもしれませんが、ノートを取ったり、何度も読んだり、過去のメッセージを聞き返してみたら、より深く理解できると思います。

では、セム、ハム、ヤフェテの3家族をさらに詳しく見ていきましょう。

ヤフェテの子らはゴメル、マゴグ、マダイ、ヤワン、トバル、メシエク、ティラス。(創世記 10:2)

ゴメルは今のドイツ。

マゴグ。預言を学んでいる人、ピンと来ましたか？ 大事な名前。

そして、トバルとメシエク。

マゴグ、トバル、メシエクはエゼキエル書 38・39 章に出て来るのでメモして下さい。

この3か国は預言的に極めて重要で、終末の時、北からイスラエルに攻め込んで来ると書かれている鍵となる国々です。

それは、携挙の直前か、または直後に起こります。

マゴグは別名ロシア、トバルはトバルスクと呼ばれている地域、メシエクは古代のモスクワ。

マゴグ=ロシアは何世紀も前から歴史学者によって証明されていて、世界的に周知の事実です。

従ってこれは、聖書学者や預言研究者が、エゼキエル書 38・39 章に当てはまるようにと作り上げたことではありません。

聖書を信じていない古代歴史学者でさえも「マゴグは現代のロシアだ。」と言っているのです。

先日 (*1997 年)、息子のピーター・ジョンと話していたのですが、スペースシャトルから地球を見た時に、中国の万里の長城が見えます。

世界の不思議の一つ、長さ 7000 マイルの巨大な壁。

写真で見たことがあるでしょう。実際に歩いた人もいるかもしれませんね。

その巨大な壁を中国人は“マゴグの壁”と呼んでいるのです。

なぜなら、歴代の敵ロシアを防ぐための壁だから。

万里の長城は、マゴグ人、現在のロシア人の侵入を防ぐためのものと言えます。

なぜ、こんなに時間をかけて説明するかと言うと、聖書預言について話すと、必ずこう言う人がいるから。

「どうして、マゴグが今のロシアだと分かるんだ？ おまえたちが勝手に作り上げているだけだろう。」

いいえ、違います。

古代史を学んだり、今の中国人やロシア人に聞いたら、彼らはマゴグ＝現代のロシアだと知っています。

トバル＝トバルスク、メシエク＝モスクワ。

2 節でマゴグの後に来るのはマダイ。

これは、メディア人とペルシャ人。

「メディア人とペルシャ人!? ちょっと待った！ メディアにペルシャと言うと、今のイラン!？」

その通り。

ここをよく把握しておいて下さいよ。

そうすれば、まさしく今現在（*1997 年）起きている中東の謎が理解できるから。

どうして、イランとイラクは歴史上、絶えず敵対しているのか。

イラク人サダム・フセインはアラブ民族で、セムの子孫。

しかし、イラン人は本質的にアラブ民族ではなくペルシャ民族で、ヤフェテの子孫。

実際、言語もアラビア語ではなく、今もファルシ（ペルシャ語）です。

彼らにはアラブの慣習も確かなアラブの特徴もありますが、本質的にも、民族学的にもアラブ人ではない。

だから、イランとイラクはいつの時代も、何をやっても、どこまで行っても争っているのです。

それに関しては歴史を見れば分かりますね。

さて、イランとイラクは敵対同士ですが、彼らが手を携えて共に牙を剥く共通の標的がいます。

ユダヤ人、イスラエルです。

数週間前にも（*1997 年）イランとイラクは、シオニズム及びイスラエルのネタニヤフ首相のシオニズム傾向推進に反対する共同声明にサインしましたね。

彼らは互いに敵対し合うのに、とりわけ、イスラエルとユダヤ人に対しては、更に大きな憎悪で結び付く。

それで、今までも、今現在も、これから先もずっと、イスラエルに対して戦争を仕掛けるのです。

興味深いのが、ヤフェテの子孫としてマダイ（メディアとペルシャ＝イラン）の後に続くヤワン＝ギリシャ。

ギリシャ文明、ギリシャの発達した社会はヤフェテから興りました。

そして、2 節最後に出て来るのがティラス＝イタリア。

ゴメルの子らはアシュケナズ、リファテ、トガルマ。(創世記 10:3)

トガルマ＝今のトルコ地域。

その子孫はトルコに定住しました。

中東問題をひも解くには、ここが重要です。

トルコもまた、セムの子孫ではなくヤフェテの子孫。

これで、世界各国の関係が、どうしてそうなのか地政学的に見えてくるでしょう。

とても興味深いですね。

もう一つのポイント。

アシュケナズ＝東ドイツ及び東ヨーロッパ。

イスラエルに行こうとしている人、行ったことのある人、イスラエルやユダヤ文化に精通している人は、イス

ラエルのユダヤ人の中でさえも民族間の緊張があることを知っているでしょう。
なぜなら、ユダヤ人には二つのグループがあって、一つはアシュケナズから出たアシュケナジー。
AD70 年、ローマがイスラエルに攻め入った時、ユダヤ人は世界離散しました。
その多くはイスラエルを追われた後、ドイツと東ヨーロッパ地域、ポーランド、オーストリアに根を張り、猛烈に増えていって、1940 年にアドルフ・ヒトラーが権力を得るまで続きました。
彼らがアシュケナジー系ユダヤ人です。
アシュケナジー系ユダヤ人は、イスラエルでも、ヨーロッパのその地域でも、今も大きな割合を占めています。

もう一つはスファラディー系ユダヤ人。
彼らもスペイン、ポルトガル、地中海周辺のヨーロッパの大きな範囲に存在しています。

この二つのグループは、見た目も文化も生活様式も異なります。
そのため、イスラエルをよく知らない間は混乱しますが、一度学ぶとすぐに分かるようになりますよ。
アシュケナジー系ユダヤ人はヨーロッパ人風。
スファラディー系ユダヤ人はもっとメディトレニアン（地中海）風の外見で、特徴があります。
イスラエルに行ったり住んだりしたら、全く異なるグループのユダヤ人がいることに気づくはずですよ。
その説明がここでなされているのです。
アシュケナジー系ユダヤ人はアシュケナズ（3 節）の地域、つまり東ヨーロッパ、ドイツから出た。
と言っても、誤解しないで下さい。

“アシュケナジーがヤフェテと関係がある” という意味ではありません。
そうではなく、彼らが、“アシュケナズと呼ばれるドイツ、東ヨーロッパ地域から来ている” ということです。

4 節、タルシシュ人を含めた人々の説明が続きます。

ヤワンの子らはエリシャ、タルシシュ、キティム、ドダニム。(創世記 10:4)

これは論議が交わされている部分ですが、タルシシュ＝スペインまたはイギリス。
学者たちは議論を重ねていますが、多くはスペインだと言っています。
タルシシュと言えば、神が行けと言った場所に行きたくなくて、大魚に呑み込まれたヘブル人の預言者ヨナが目指した所。
彼はタルシシュ（スペイン又はイギリス、もしくは両方）行きの船に乗りました。
今夜は話しませんが、それにも理由があったのです。

つづく

主よ、あなたは私の神。

私はあなたをあげ、御名をほめたたえます。

あなたは遠い昔からの不思議なご計画を、まことに、真実に成し遂げられました。(イザヤ 25:1)